

# 江戸前期と明末清初における遊廓<sup>1</sup>文化について

陳 羿秀

## 1. はじめに

中国では唐代にすでに遊廓ができていた。唐代は妓女たちが大活躍した時代であり、明代の名妓文化の芽生えは唐代であるといっても過言ではないであろう。その根拠は『全唐詩』にある。49403 首の詩が収められた『全唐詩』には、妓女に関する詩が二千首もある。また妓女が自分で作った詩も 136 首ある。ここから鑑みるに、唐代から、中国の妓女と文学の関係は切っても切り離せないものになったともいえよう。そして明末清初になって、その妓女文化は頂点に達し、名妓と文人のロマンスもたくさん生まれた。日本の初の遊廓が成立したのは豊臣秀吉の時代で、日本では遊廓を造った際、中国の遊廓を手本にした可能性はかなり高い。中国の遊廓を手本にした可能性は無いとしても、やはり何かの影響を受けたのではないかと思われる。また、日本が遊廓を造った時期は中国より遅いが、江戸の吉原から生まれた遊女文化も中国と同じように、当代の文芸に多大な影響を与えた。本稿では、遊廓文化が一番盛んな江戸前期の吉原と明末清初の秦淮の遊廓を主な調査対象とし、その二つの代表的な遊廓を通して、日中両国の遊廓の相違や類似点を明らかにしたい。また、その調査をする前に、まず日中両国の初の遊廓であった唐代の平康坊と秀吉時代で立てた島原を調査し、平康坊が日本の遊廓に影響を与えたかどうかを追求する。それから、遊廓文化はなぜ日中両国の文学や文芸に大きな影響を与えたのかについても検討してみたい。

## 2. 平康坊と島原

### 2.1 平康坊について

まずは唐代の孫棨の『北里志』を手がかりにし、当時の遊廓の実像を覗いてみよう。「北里」は長安城の中央部からやや東、東市のすぐ西隣の平康坊にあった。東西に伸びる道に沿って、北のほうから北曲、中曲、南曲という三つの町があった。格式の高い妓女たちはほとんど中曲、南曲に集まったのに対し、北曲は格式の低い妓女たちの集まる場所だった。格式の高い妓楼では、「前後植花卉、或有怪石盆池、左右対設」と『北里志』が記されたように、入り口や庭には花を植えたり、珍しい形の石を置いたりした。そして、妓楼で使う品物も高級で上品なものばかりだった。妓女た

ちはそれぞれ自分の部屋をもった。妓女たちの接客の様態は二つあり、一つは妓楼でお客を招待すること、二つ目はお客の求めに応じ、客の家や宴会へ行って、宴会に興を添えることである。妓女に対する管理はとて厳しく、毎月の尼僧の俗講を聞く以外に、ほとんど外出は許されなかった。お客のお供として外へ出ることは許されたが、それ以外のことは厳しく管理されていた。客はほとんど科擧の合格者や下級官僚だった。科擧の合格者（進士）は妓楼で私的な宴会を開いた。「兼毎年進士以紅箋名紙游謁其中」と孫棨が書いたように、それらの進士は、妓女に会う前に、まず赤い紙を妓楼に送らなければならなかった。また、北里の妓女たちは官妓ではないが、教坊に属しているので、官僚が妓女を自分の家に呼んだり、あるいは妓女を宴会に呼びたい場合もやはり孫棨が書いているように「凡朝士宴集、須俛諸曹署行牒、然後能致妓於他処」府尹のサインが必要だった。妓女たちの接する客はほとんど士大夫だったので、「其中諸妓、多能談吐、頗有知書言語者」と『北里志』に書いてあるように、妓女たちの中には、学識があり、そして話術が巧みな者もかなりいたことが伺える。とくに酒宴に呼ばれる妓女は座を盛り上げるのが彼女たちの役目であったので、酒令の遊び方と機智に富んだ会話能力を身につけなければならなかった。つまり、妓女たちは顔がうつくしいかどうかはともかくとして、知識的、技芸的な教養をもたないと、やはり一流の妓女だと認められなかったのである。

### 2.2 島原について

天正十七年（1589）、豊臣秀吉は京都で上、中、下三町よりなる遊廓を二条柳町で開き、京都の傾城屋を一つのところにまとめた。その傾城屋の主人は林一郎と原三郎左衛門であった。「万里の小路の上に柳の樹あまた有り、」<sup>2</sup>とあるように、その柳町の周囲に柳の樹が植えてあることや、遊廓が上、中、下三町に分かれていることも、中国の唐代からの影響ではないかと思われる。徳川家康は、慶長七年（1602）二条柳町を六条に移転させ、敷地を東西に上、中、下三町の三筋の道を通し、六条三筋町と呼んだ。徳川家光のとき、寛永十七年（1640）には、西の島原に移転され、一箇所だけ門を開くという「囲い込み式」の遊廓が造られた。その遊廓は南北に三筋の道が通され、中央に東西路が

設けられ、六つの町に分けられていた。島原の遊廓には大夫、天神、端などの上下の等級があった。太夫のような格式の高い遊女は、まず揚屋から差紙が遣わされ、その後、妓楼から揚屋に赴いたが、それを「道中」という。その揚屋制度が中国と関係があったかどうかは定かではないが、その揚屋の規模に関しては、「唐土にては女を高き所に置く。其所の簾幕など青色にすとなり。また紅楼ともあり。日本にも、かやうの所、すべて二階座敷を重（二重）にしつらへるも唐土の余風にや」（細見『一目千軒』）<sup>3</sup>と中国から影響を受けたのではないかとする説もある。また揚屋制度は、中世の遊女が客の宿所を訪ねる風習から、近世の囲い込みにより変化したものではないかとする説もある。<sup>4</sup>いずれにせよ、その揚屋制度は確かにほかの国では見られない日本の独自の遊廓制度だと見做して良いであろう。それらの格式高い遊女たちは中国の唐代の妓女と同じように音曲、和歌などの教養が必要とされた。

### 3. 吉原と秦淮の遊廓の成立と発展

#### 3.1 吉原の成立と発展

慶長十年（1605）の頃、江戸城の修築により、内柳町の遊女屋は元誓願寺へ移転を命じられた。この移転命令を契機として、最初の遊廓設置の陳情が行われたが、幕府はそれを認めなかった。また、つづいて慶長十七年（1612）、庄司甚右衛門を中心に、遊女屋の主人たちは再び陳情書を幕府に提出した。今回の陳情は元和三年（1617）によりやく幕府の許可を得、遊廓の開設が許され、庄司甚右衛門を遊廓の名主として命じられた。それ以降は遊廓以外の遊女屋経営は一切禁止された。元和四年（1618）、吉原はようやく開業された。当時その辺はもともと葦や葎などが一面に生えた所だったので、初め葎原と呼ばれたが、寛永三年（1626）それを吉原と改めた。明暦三年（1657）、江戸に大火が起こった。吉原も全部焼けたので、同年の六月に幕府の命令により、遊女屋が日本堤から浅草へと移転された。まだ工事中であるため、その近くの今戸、鳥越、三谷の百姓家を借りて、この「仮宅」で営業し始めた。明暦三年（1657）八月、新遊廓が開業し、この遊廓は「新吉原」と呼ばれた。配られた土地は五割も増したため、町はももとの五町のほかに揚屋町を作った。遊廓開設後、吉原は元禄期の大尺遊び<sup>5</sup>（紀伊国屋文左衛門）、享保期の商人らの通人遊び、また最後の明和、化政期の岡場所<sup>6</sup>の発達を経て、幕末を迎えた。そして、昭和三十三年（1958）年売春防止法が実施されると、遊廓吉原の歴史はついに終わったのである。

#### 3.2 秦淮の遊廓の成立と発展

明太祖は建国に当たり、当時の首都であった南京の乾道橋に富楽院という公的な遊廓を設け、そして、その後また富楽院を武定橋の方に移した。また、富楽院のほかにも、明太祖はまた十六箇所の遊廓をたてた。富楽院は金持ち向けの遊廓であったのに対し、十六箇所の遊廓は庶民向けのものであった。そして、明末のころになると、富楽院と十六箇所の遊廓も廢れるようになり、残ったのは南市、珠市と旧院だけであった。秦淮の遊廓は明末のころその最盛期を迎え、その繁盛ぶりは余懷の『板橋雜記』にも多く記録されていた。南市や珠市は遊廓としてあまり標準が高くなかったのに対し、旧院は名妓<sup>7</sup>と花魁がたくさん集まる格式の高い遊廓であった。また、江南地区は河や運河は発達していたため、秦淮の遊廓は殆ど秦淮河沿いに開かれていた。したがって、文人たちが妓女を伴って画舫を浮かべる様子は秦淮の遊廓の特殊な風景となった。旧院は昔の富楽院であったから、旧院と呼ばれ、また、一般的には「曲中」とも呼ばれ、周囲は塀で囲まれていたという。この旧院は明末清初の秦淮の遊廓の中心となり、「秦淮八艷」と呼ばれる名妓たちも続々と現れ、当時の優れた文人たちと詩を交換し、また、「わたしが同人と詩文の会を催すときは、いつも必ず十娘の家に向うくことにしていた。」と『板橋雜記』<sup>8</sup>に記録されたように、名妓はよく文人たちの主催した政治や文学の討論会に出て、その名妓自身がその文学討論会の主役や主催者になることもめずらしくなかった。当時の秦淮の遊廓はまさに文人の文芸サロンといえよう。そして、明末清初戦争がはじまり、清初旧院も戦争のために焼け落ちた。明末に盛んになった名妓文化もついに幕を閉じたのである。

### 4. 吉原と秦淮の遊廓の遊び

#### 4.1 吉原の遊び

吉原成立の初期には、遊び方にこれといった決まりはなかったが、やがて徐々に遊びの仕組みが決まってきた。ここでは、「太夫」で遊ぶ場合を例にしてみよう。まず遊客は揚屋<sup>9</sup>に入り、遊女を指名する。そして揚屋はその指名に基づき、揚屋差紙<sup>10</sup>を作り、若者（遊女屋で働く男性）にもたせて遊女屋へ走らせた。遊女屋はこの紙を受け取ると太夫が揚屋に向けた。遊女が揚屋に来るまでの間、客は替間（ほうかん）（男芸者。遊興を助ける）や芸者の芸を見ながら待つ。そのとき太夫が禿、新造などを連れていくことを「道中」<sup>11</sup>（揚屋入り）という。太夫は揚屋につくと、客のいる座敷に入って、挨拶して返る。それは「初会」という。

遊客はその初会するとき太夫の手も握れない。そして二度目のときに、「裏を返す」といい、太夫はお客と会話をする。三回目になると、遊客はもう馴染みになったと見なされるので、何をすることも自由である。その代わりに、客の浮気は許されない。揚屋で遊ぶこの方法を揚屋制度という。太夫の揚代、祝儀、手数料などすべてに金を払うのが面倒で、この「揚屋制度」と太夫が消えたとする向きもある。また、遊女のきぬぎぬの別れもとても重要視されていた。それは遊女が客を翌朝に送り出すときの挨拶であり、遊女は客の身支度の世話をしながら、別れ惜しげな様子を客に見せるのである。遊女がどれぐらい客の気を引けるかということは常に彼女たちの稼ぎに影響を与える。それ以降、引手茶屋が揚屋にかわって、遊びの仲介をするようになったが、そこでの遊びは直接で安くて、町人も遊びにいけるところとなった。また、茶屋の仲介がなくても、直ちに妓楼へ赴くことも可能になった。明和以降は大名の経済力がだんだん衰えて、豪遊もあまりできなくなり、その代わりに、町人が遊廓の主なお客となった。そして、遊女屋の営業時間については、昼見世は九つ（正午）より夕七つ（四時）までであり、夜見世は六つ（六時）より四時（十時）までである。

#### 4.2 秦淮の遊廓の遊び

秦淮の遊廓の遊びが小説の『金瓶梅』はもっとも詳しく記録されている。またその遊びの方法は宋代からすでに存在したものが多かった。格式の高い旧院では、妓女遊びの手順として、「打茶囲」という方法があった。その遊びの方法は宋代はすでにあり、「吃花茶」という。まず客が妓楼に入り、妓女が高級なお茶を客に出すと、客は妓女にチップを渡す。その金を「点花茶」という。明代になると、「吃花茶」は「打茶囲」という方法に変わった。客は妓楼<sup>12</sup>に入ったあと、すぐある部屋に案内される。そして遊廓の人が客になじみの妓女がいるかどうかを聞く。もしなじみの妓女がなかったら、「見客」になる。すると、たくさんの妓女たちが次から次へと部屋に入り、顔見世をする。客は気に入った妓女を指名し、本部屋に移る。それから、妓女は客とお茶を飲んだり会話をしたりする。その「打茶囲」を何度かして、客が妓女と馴染みになったとしても、まだどんなことをしても許される段階にはなっていない。もし客が妓女と深い関係になりたいなら、その客はまず友人やその馴染みの妓女を大いに招待し、宴会を開かなければいけない。その儀式を「吃花酒」といい、大金がかかる。その「吃花酒」のあそび方もすでに宋代からあったもので、「点花牌」といい、当時の人は酒樓で名札で妓女を指名するという方法であった。客は妓

女とその「吃花酒」をしてから、はじめて床入りが許される。それも「梳弄」というような水揚げの儀式が必要だった。中国では、儒教の考えの影響で、とても女性が処女であるかどうかを気にするので、「餓死事極小、失節事極大」といわれたように、もしその妓女は処女でなければ、それは「失節」のことになった。したがって、中国の男性は古くから、特に宋代以降は女性の処女の純潔への愛好が著しくなったので、その水揚げの儀式が行われたのはむしろ自然であろう。

その「梳弄」の手順をみてみよう。まず妓女は「梳弄」する前に客と「清和合酒」を飲む。それから縁起のいい日を選んで、正式な「梳弄」儀式を行うのである。妓女は「梳弄」が終わってから、自分が本当に処女だと証明するために血で染めたハンカチを証拠として客に渡す。その儀式を行うにもかなりの大金がかかる。また、「打茶囲」をしてから、客が妓女と馴染みになった場合、妓女を外に呼び出し、自分の宴会で唄を歌わせることを「出局」という。客は妓女を外へ呼ぶ場合、まず局票に、自分の名と指名する妓女の名を記入し、そして使いにその紙を持たせて妓楼に申請する。その「出局」のあそび方法は先の「吃花酒」と同じように、「点花牌」の遊び方の延長といえよう。しかし、所詮秦淮の旧院のような高級な遊廓で遊べる客はほとんど名高い文人であり、普通の庶民たちは名妓と顔をあわせることさえ無理な話であった。

### 5. 吉原の遊女と秦淮の妓女

#### 5.1 吉原の遊女

吉原の一番高級な遊女の太夫を紹介しよう。太夫たちの住む妓楼の内部は外観でも客の心を惹くために、できるだけ豪華にし、遊女の服装なども全て一流の高級品にし、妓楼を天国のように作り上げた。太夫を呼ぶにはとてもお金がかかるので、太夫の接する客は殆ど武士や金持ちだった。また、吉原の太夫の服装は京阪と比べると、かなり華やかだった。太夫は「幼少よりの育てがら、立居振舞髪容第一気取を大切とし、禿の時より姉女郎の仕込方あることなり。就中其古、太夫・格子の上品に至りては、琴三弦はいふに及ばず、詩哥・俳諧・香・茶の湯、碁・双六・碁方、何れの道にも闇からず、諸芸を知って知った顔せず、見識あつてべた付かず」と『里のをだ巻評』<sup>13</sup>に記されているように舞、管弦はもとより、茶道、和歌、俳諧などさまざまな教養を身につけなければいけない。なお、『八代集』、『源氏物語』などにも通曉し、無点の漢文も読めるように育てられた。容姿ももちろん素晴らしく、松の位<sup>14</sup>とも呼ばれた。太夫の接する客は地位の高い人だったの

で、高い教養を身につける必要がある。優れた太夫はどんな客でも見事にこなせる。これらの太夫は遠い地方の貧乏な農村からか買い集めてきて、小さい時から育てた女性である。そして、その子供が将来立派な太夫になれるかどうかを判断する人は女衞（ぜげん）という。また、将来太夫になる子供たちは毎日卵の白身で襟足を磨いた。遊女が抜襟で襟足を美しく見せた。それが男を魅了する方法だったからである。しかも、これらの太夫は蚊帳を自分で持ち上げて入るということはないで、禿が両側から蚊帳を持ち上げて、団扇で扇いでいるところを太夫が蚊帳の中に入るといふ。大名の奥方のような高貴な品格と、優雅な坐作進退を備えた天下絶世の美人が遊女屋で育てられたのである。太夫は吉原独特の言葉遣いをして、それは「ありんす言葉」と呼ばれる。たとえば、「わちき」は「私」の意味で、「しりーせん」は「しりません」など、吉原独特な廓言葉を使った。また、たとえ大名が来たとしても、気に入らないと、思いのままにはさせず、「意気」を示した。また、「江戸の遊女は強ひて金銭に泥まらず、見識を専らとするを良とす。古き俚言にも、京の女郎に長崎の衣裳を着せ、江戸の張りを持たせ、大坂の揚屋に遊びたしと云ふことあり。」（『守貞謾稿』）<sup>15</sup>と述べられているように、「意気」と「張り」は京阪の遊女にはない、吉原遊女の特徴であったともいえよう。

## 5.2 秦淮の遊廓の妓女

秦淮の旧院の名妓を紹介してみよう。まず、『板橋雑記』<sup>16</sup>の内容に沿って当時の名妓董小宛の様子を見てみると、「裁縫や管弦の古もすばらしく器用で、『食譜』や『茶経』など通曉しないものとはなかった」と『板橋雑記』に記されているように、当時の妓女たちはいろいろな芸を身につけなければならなかった。歌と踊りはもとより、琴棋書画や詩文もすべてこなさなければいけない。なぜかという、名妓たちの客はほとんど文人<sup>17</sup>たちや地位のある人ばかりだからである。客はほとんど文人たちであるせい、名妓たちも文人に劣らぬ書齋をもっていた。名妓の部屋の中にも文人のように盆栽と書架などが置かれていた。また名妓は文人に勝るとも劣らぬ素晴らしい詩文や絵画を残している。それを妓女の「文人化」<sup>18</sup>ということもできるだろう。また、名妓は妓楼の神秘的な雰囲気をつくるために、部屋の中においてある生け花から、香炉の香りまで周到に工夫を凝らさなければいけない。そのゆえ、名妓の部屋に入ったお客はすぐ俗界から離れた印象を受けた。そして、妓女的美を判断する基準は、容姿だけではない。その妓女の性格や言葉遣いの品位などもすべて考慮に入れなければいけない。また、衣装も典

雅で地味なものを上品とし、派手なものは下品であった。当時の文人たちの間では、それらの名妓と交際することは一つの社会的流行となり、文人たちは皆名高い名妓と知り合えることを誇りに思っていた。つまり、名妓と交際することは、色事に耽ることだと見なされていたわけではないのである。明末清初の国難の時代に、多くの名妓がその歴史の大舞台上で活躍し、文人たち以上の愛国心を示した。その代表としては柳如是という名妓がある。彼女は当時の名士であった錢謙益<sup>19</sup>の夫人であり、清軍が揚州に入った時、彼女は節義を守るため、自決するように錢謙益に勧めたが、錢謙益はそれを躊躇ったため、彼女は池に身を投げようとしたといわれる。気骨のある名妓であった。気骨のある名妓が登場したことは妓女の文人化と大いに関係があるのであろう。

## 6. 終わりに

以上、吉原と秦淮の旧院の風貌を簡単に見てきた。両者にはかなりの共通点があるとはいえ、やはり相違したところがあると思われる。中国はやはり儒学の影響が強い国なので、所詮妓女という性的なイメージがあるものを文学の中心にすることは許されなかったのに対し、日本では江戸時代に「遊里文学」のジャンルはかなり発達していた。そのような違いはやはり両国の「色好み」という概念に対しての違いからうまれたのではないだろうか。その問題について今後の課題として追求したい。なお、秀吉時代の遊廓に関する記録があまり残っていないため、その遊廓制度が果たして実際に中国の遊廓に倣って建てたかどうかは今でも不明であるが、平清盛の時代から、日本と中国の貿易交流がかなり盛んに行われ、その頻繁な交流の間に中国の遊廓制度が日本に伝わったのではないかと思われる。その問題についても今後の一つの課題として追求してみたいと思う。

## 注

1. 日本の遊廓は郭、色里ともいい、公娼を集めて居住させた特別区画。遊廓は多く郊外に設置され、周囲を溝で囲み、大門のみを通行口として隔離した。特異な習俗、作法、廓詞を持ち、揚屋制度などを有し、江戸期の文化形成に一定の影響を与えた。『広辞苑』第五版より
2. 斜天吞獅（寛政十三年印本）『一目千軒』より
3. 斜天吞獅（寛政十三年印本）『一目千軒』より
4. 後藤紀彦、網野善彦（2002）『週刊朝日百科 3 日本の歴史 中世Ⅰ—③遊女・傀儡・白拍子』朝日新聞社 p 4-96
5. 遊里で豪遊すること。『広辞苑』第五版より

6. 江戸にあった私娼地の称。官許の吉原以外の、深川、築地、品川、新宿など。『広辞苑』第五版より
7. 有名な芸妓。『広辞苑』第五版より
8. 訳者岩城秀夫（1964）『板橋雑記上巻』平凡社
9. 遊里で、遊女屋（置屋）から遊女を呼んで遊ぶ家。『広辞苑』第五版より
10. 揚屋から遊女屋へ、客の名指した遊女の名を記して呼びにやる券。『広辞苑』第五版より
11. 遊女がある一定の日に盛装して郭内を練り歩くこと。吉原では花魁が引手茶屋へ往來するのをいい、その歩き方に内八文字、外八文字などというのがあった。『広辞苑』第五版より
12. 中国の妓楼は「妓院」と呼ばれ、そして妓院のほかに、またたくさんの異称があり、たとえば青楼、瓦子、風月所、勾欄、北里、火坑、花街柳巷などがある。徐君、楊海（1995）『妓女史』上海文芸出版社 p102より
13. 中村幸彦校註（1961）「里のをだ巻評」『風来山人集 日本古典文学大系 55』岩波書店
14. 『松屋筆記』によると、「松位と書くは、太夫といふべきを秦の始皇が雨やどりした松の木を大夫に封ぜしといへる故事によりて、松位と書けるなり」小野武雄（2004）『江戸の色里』展望社 p87より
15. 喜田川守貞（1853）『守貞謄稿』
16. 訳者岩城秀夫（1964）『板橋雑記上巻』平凡社
17. 「文人」とは経世済民という儒家的な考え方と使命を持ち、作詩文の能力を身につけた士大夫の、私的な生活のあり方を指す言葉である。斉藤茂（2000）『妓女と中国文人』東方書店 p74より
18. 王鴻泰（1998）『流動与互動—由明清間城市生活的特性探測公衆場域的開展』国立台湾大学歴史研究所博士論文第三章「青楼名妓与情芸生活」
19. 明末清初の文人、蔵書家。初め明に仕え、のち清の礼部右侍郎。文は雅俗を合わせて、唐宋八大家に折衷し、詩は唐宋の両風を採った。『広辞苑』第五版より

参考文献

- 岩城秀夫訳（1964）『板橋雑記、蘇州画舫録』平凡社  
大久保葩雪（1906）『花街風俗誌』日本図書センター  
尾崎久弥（1931）『吉原図会』日本図書センター  
大木康（2002）『中国遊里空間 明清秦淮妓女の世界』青土社  
小野武雄（2004）『江戸の色里』展望社  
小野武雄（2002）『吉原と島原』講談社  
王書奴（1972）『中国娼妓史』万年青書店  
王鴻泰（1998）『流動与互動—由明清間城市生活的特性探測公衆場域的開展』国立台湾大学歴史研究所博士論文

ちん げいしゅう／台湾大學大学院 修士課程2年